

〈研修会報告〉

福岡県書写書道教育研究大会に参加して

八女高校 古賀 由佳

令和六年八月十九日(月)に福岡教育大学アカデミックホールにて、研究主題を「これからの書写・書道教育を考える」小・中・高等学校の教育実践を通して」として、令和六年度福岡県書写書道教育研究大会が行われた。

初めに宮崎大学の教授でいらつしやる山元宏先生に『説文解字』と漢字学習」と題してご講演いただいた。日本における漢和辞典の部首式索引の基礎となっている中国の清時代の『康熙字典』のことや漢字の部首によって分類した最古の漢字字典である『説文解字』のことについて教えていただいた。漢和辞典の漢字の部首は基本的にはおおむね康熙字典の部首法に倣っているが、改定されるとそれぞれの漢和辞典によって部首が異なる場合があるということを学んだ。旧字体から字形が変わった漢字の部首においても『漢字源』や『新字源』などでそれぞれ違っている理由を詳しく教わった。

また、「文を説き字を解する」書物である『説文解字』を理解した。そこで、漢字の成り立ちについて具体的な例から考えた。一つ目は「なぜ、象形文字の「目」という漢字が横向きから縦書きに変化したのだろうか」という問いに対して考えた。二つ目は「王」という字に象徴される「まさかり」のことや「耳」と「取」という字に又がつく意味、「友」という字の又と又について教わった。三つ目は「走れメロス」に出てくる「歎歎」

という読みが分からずとも関連する字と照らし合わせ、意味を捉える」と難しい漢字もよむことができることや漢字の九割が形声文字であり、「蚊」の文のところに「ブーン」と「鳩」の九のところに「クック」という音でつくられたものなど他にもたくさん知らないことを知ることができた。

次に実践報告をしていた。初めに、橋本巴咲先生の小学校実践発表をしていただいた。目標に対するポイントが明確であり、チェックシートや対話的学びを手立てとして生徒たちの成長が見受けられる実践例であった。次に、三木祐佳里先生から中学校実践報告をしていただいた。三年間の書写教育を通して、行書の学習を計画的に実施し、生徒の成長が感じられるような振り返りシートを工夫されていた。最後に、福元隆寛先生から高等学校実践報告をしていただいた。緻密な授業計画であり、今後の創作の授業に参考にしたい実践例であった。生徒の作品は意図に沿う表現の工夫をしており、短時間での作品には思えないほどであった。最後にグループディスカッションを行い、書写書道教育上での今の悩みについて語り合った。私たちの班は篆刻の布字のやり方や印刀、創作などについて語り合い、他校の授業内容を共有することができて参考になった。

今回、短時間ではあったが、興味深いお話から小学校から高等学校の実践発表等まで同時に学ぶことができ、今後の授業等に活かすことができ有意義な研修であった。